

Speech and Interaction Integrated Language Activities Based on Task-Based Language Teaching at a Public Junior High School

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠宮, 広樹, 梅田, 晃, 飯沼, 拓弥 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028721

教育実践報告

TBLT をベースにした発表型・やり取り型の2領域統合型言語活動(2)

～公立中学校での実証授業を通して～

篠宮広樹¹, 梅田 晃², 飯沼拓弥³

(静岡大学教育学部附属島田中学校^{1,2}, 藤枝市立青島北中学校³)

Speech and Interaction Integrated Language Activities Based on Task-Based Language Teaching at a Public Junior High School

Hiroki Shinomiya Akira Umeda Takuya Inuma

要旨

昨年度静岡大学教育学部附属島田中学校(以下, 島田中)英語科では「安心して英語で自分の気持ちや考えを発表し, そこから発表者と聞き手が発表内容に関して活発なやり取りを行うことができる生徒」の育成を目指し, 「TBLTをベースにした発表型・やり取り型の2領域統合型言語活動」を研究テーマに設定し授業改善に取り組んだ。島田中においては昨年度取り組んだ実践によってタスクベースの2領域統合型言語活動は生徒の英語を学ぶ意欲及びコミュニケーションを図る資質・能力を向上させる上で効果的であることが明らかとなった(篠宮・梅田, 2021)。本年度はこの昨年度の島田中の実践を他校で実施し, 同様の効果を得られるか否かを検証することを本研究の目的とする。

キーワード: タスク 話すこと やり取り ルーブリック パフォーマンス評価

1 研究目的

昨年度島田中英語科では, 全ての学年において, 毎単元末にタスクを設定し, 目的, 場面に応じた発表隊形の追究, 生徒へのルーブリックの提示をすることで「安心して英語で自分の気持ちや考えを発表し, そこから発表者と聞き手が発表内容に関して活発なやり取りを行うことができる生徒」の育成を目指し, 授業改善に取り組んだ。昨年度の第2学年104名の生徒を対象に行った質問紙調査によると86%の生徒が「今年度タスクに取り組んでいることで, 前年度(1年生の時)より英語を「話すこと」に対し, 抵抗感が減ったと感じる」(否定率5%, 平均値4.3)と回答し, 島田中において, 取り組んだタスクベースの2領域統合型言語活動は, 生徒の英語を学ぶ意欲及びコミュニケーションを図る資質・能力を向上させるうえで効果的であることが明らかになった(篠宮・梅田, 2021)。

本年度は昨年度設定したタスクをリデザインして指導に当たっている。本年度より初めて島田中英語科の授業を受ける1年生への4月から12月に行ったタスクの振り返り調査によると「タスクに意欲的に取り組むことができた」に対し94%の生徒が「そう思う」と答え, 「タスクに取り組むことで, 話すこと・書くことの力が向上したと感じる」に対して85.2%の生徒が「そう思う」と回答している。このことから, 島田中において設定しているタスクが意欲面, 技能面ともに効果的に働いていると考える。

また, 新たな取組として, 島田中の研究成果の汎用性を検証するために, 研究協力校である藤枝市立青島北中学校(以下, 青北中)において島田中の実践を取り入れた授業改善を進めることとした。

2 研究仮説

生徒にとって魅力的な発表型タスク活動を課し, 発表からやり取りへと移行する言語活動を設定することで「話すこと」におけるコミュニケーションを図る資質・能力を育成することができるのではないかと仮説を立てた。

昨年度の島田中英語科の取り組み同様「安心して英語で自分の気持ちや考えを発表し, そこから発表者と聞き手が発表内容に関して活発なやり取りを行うことができる生徒」を, 「コミュニケーションを図る資質・能力を備えた生徒」と設定し, 授業改善に取り組んでいく。

3 研究方法

(1) 発表型タスクの充実

「取り組んでみたい」「自分の思いを伝えたい」「友達に聴いてもらいたい」と, 生徒の意欲が向上するような発表型タスクを, 各学年において年間を通して複数回ずつ設定する。その際, ルーブリックを活用しながら, 生徒のパフォーマンス力が向上するように指導していく。

(2) 発表隊形の工夫

全体発表, グループ発表, ブース発表など, タスクの内容に応じた発表隊形を用いる。

(3) 帯活動によるスモールトークの実施

発表後に即興的なやり取りが自然に行えるよう、帯活動としてスモールトークを実施し、生徒の質疑応答をする力を高める。

(4) ルーブリックの作成

タスク開始時に評価規(基)準を生徒に提示し、目指す姿を明確化する。更にパフォーマンスに対する評価を生徒にフィードバックすることで、課題意識をもち、次のタスクへの意欲を高める。

4 青北中の実態

青北中3年生は英語に対する学習意欲が高く、言語活動に積極的に取り組む生徒が多い。令和3年7月に実施した質問紙調査によると「1学期の英語の授業を楽しめた」と回答した生徒の割合は、93.6%であった(対象は中学3年生93名、5段階法で実施)。これは、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を育むために、目的・場面・状況を意識した授業づくりを行った成果であると考えられる。

一方で、与えられたパターンでのやり取りは行えるものの即興的に質問をつけ足していく生徒は多くなかった。また、自身の英語が正しいのか不安になることで、自分の思いを積極的に話したり書いたりすることが苦手な生徒が少なからず見られた。昨年度までゲーム形式の活動を中心に授業を行っていたため、英語の授業に意欲的に参加する生徒は多かったが、目的・場面・状況を設定した言語活動において、既習事項をスパイラルに活用しながら自分の意見を話したり書いたりすることができなかった。発話に関しても、相手意識が乏しく、自分が伝えたいことを一方的に伝えて終わりという生徒が多いように感じた。

本研究を通して、自分の思いを伝えると同時に、聞き手に伝わる英語表現を用い、聞き手を巻き込みながらスピーチをしたり、その場で聞かれた質問に即興的に答えたりしながらタスクの達成をしようとする生徒を育てていきたいと考えた。

5 研究経過

(1) 発表型タスクの充実

① 青北中第3学年授業実践I(9月)

Task	Let's make an ideal robot!
単元 目標	友達が未来都市 Woven City で快適に生活するために自分が考えた夢のロボットについて事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができる。

本項では『Here We Go! 3』Unit 4, AI Technology and Languageにおける取組について述べる。本単元において生徒は関係代名詞(主格)の which, who, that を学んだ。関係代名詞を用いることによって自分が伝えたい人・もの・ことについての情報をより詳しく相手に伝えることができるようになる。しかし、1文が長くなり、後置修飾の概念が定着していない生徒にとっては難易度が高く感じられる可能性もあるため、正しい使い方を帯活動の中で繰り返し指導した。

本単元の題材はAIに関するものである。教科書の主人公であるティナ、コウタ、ハジメ、ブラウン先生がAIの技術に関する記事を読み、意見交換する様子が描かれている。この中で、AIを用いることのメリット、デメリットについて書かれている。それらを理解した上で、自分たちで新しいAIロボットを想像し、それを紹介し合う活動を行いたいと考えた。そこで「未来都市 Woven City で快適に生活するために自分が考えた夢のロボットを友達に紹介しよう!」というタスク活動を設定した。未来都市 Woven City とは、トヨタが静岡県裾野市に建設予定の実験都市のことである。生徒全員が未来都市 Woven City に住み、そこで快適な生活を送るために自分が必要だと思うロボットを1つだけ友達から買うことができることとした。「こんなロボットがあったらいいな」と生徒に想像させることで、主体的な学びにつながると考えた。

単元構成は以下の通りである。まず第1時に教員が考えたロボットを紹介し、生徒に本単元のタスクのイメージをもたせる。第2時から第4時にかけて本文内容及び新出言語材料について学習し、第5時から第8時にかけてスピーチの準備を行う。第9時にペアでスピーチ練習を複数回行い、第10時に本番を迎える。本番では、4人グループの中で発表を行い、グループ内のベストロボット(グループの中で最も欲しくなったロボット)を決める。各グループ内のベストロボットに選ばれた生徒は、全員の前で発表を行い、クラスで1番人気のあるロボットを決める。単元を通して、ロボットをテーマにした small talk や帯活動を繰り返し行い、簡単な語句や文を用いながら即興的にやり取りできる力を育成したいと考えた。

発表本番は6人組のグループに分かれ、教室で行っ

た。発表者に対する聞き手の人数が少なくなることで、クラス全体で発表するよりもリラックスした雰囲気で行われ、生徒同士のやり取りも活発に行われた。発表の資料として生徒は画用紙にロボットの絵を描いて聞き手に見せながら発表する形をとった。

本実践の成果として、生徒が意欲的に活動に取り組んでいたことが挙げられる。発表後の質問紙調査によると、「Unit 4 のタスク活動に意欲的に取り組んだ」に対して 74%の生徒が「そう思う」と回答し、「Unit 4 のタスク活動を通して話す力が向上した」に対しては 70%の生徒が「そう思う」と回答した。「未来都市 Woven City で快適に生活するために自分が考えた夢のロボットを友達に紹介しよう！」というタスクを設定することで「どのようにしたら自分が考えたロボットの魅力が伝わるのだろうか？」と粘り強く考える生徒の姿が見られた。

一方で、ロボットの自由度が高すぎたため、生徒の視点が定まらず、アイデアの構想に時間がかかってしまったことが課題として挙げられる。また、難しい表現をそのまま英語に直訳してしまうことで、中学生にとっては難しすぎる表現になってしまったり、直訳することで不自然な文章になってしまったりして、聞き手に正しく伝わらない場面があった。更に、原稿を読むことに終始してしまう生徒や、資料を一枚の絵に限定したことで、スピーチ内容を十分に捕捉できない生徒もいた。

②青北中第3学年授業実践Ⅱ（12月）

Task	皆が生活しやすい学校にするために学校に必要な物について校長先生に提案しよう！
単元目標	皆が生活しやすい学校にするために学校に必要なものについて事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができる。 【話すこと（発表）】 - イ

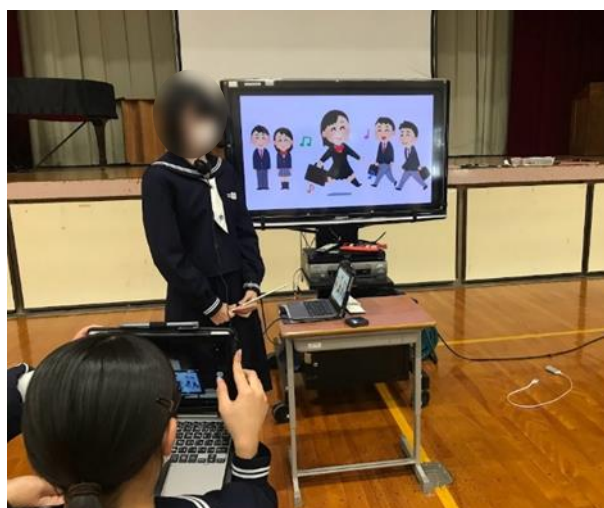
本単元は、既習事項を統合しながら言語活動に取り組むための、まとめの単元として設定した。今までに習ってきた現在完了形や関係代名詞、間接疑問文などを上手に活用しながらタスクに取り組む生徒の姿を期待した。そこで「より良い青北中を創るために学校に必要なものを校長先生に提案しよう！」というタスク

を設定した。生徒全員が学校改革委員会に所属し、青北中をより魅力的な学校にするために自分たちが必要だと思うことを、皆のアイデアから1つだけ採用し、それを後日校長先生に提案するというものである。自分たちの学校生活（校則や学校の不便さなど）について見直し、より良い学校にするために必要なことを考えることで、課題を自分事として捉え、生徒が既習事項を活用し、聴き手を巻き込みながら他者に自分の考えを提案できるような主体的な活動になると考えた。

ただし、単に学校への要望を自由に語り始めると、現実離れした個人の考えに至ってしまうことが予想されたため、評価規準「思考・判断・表現」の条件に、「根拠となるデータ(グラフや表、記事の引用など)を示している」「より良い学校にするために必要なものについて、『なぜ必要なのか』や『あるとどんないいことがあるのか』を具体的に説明している」という項目を設定した。

前回の反省から、発表では原稿を読むことがないようにするための手立てを打った。まず、生徒は自分の話したい内容を紙に書き出すのではなく、タブレットのスライド作成ソフトで話す内容を表す資料を作成した。また、不完全な状態でも何度もペアで練習し、アドバイスをし合う活動を通して自分の考えを形成、再構築し、英語表現についても正確さと同時に、聞き手にしっかりと伝わる適切さを向上していくことを目指した。

実際の発表は体育館で6人組のグループに分かれて行った。



単元終了後の質問紙調査によると 86%の生徒が「Unit 6 のタスクに意欲的に取り組むことができた」

と回答し、「Unit 6のタスクに取り組むことで話す力が向上したと感じる」に対しは82%の生徒が「そう思う」と回答した。また、『『皆が生活しやすい学校にするために学校に必要な物について校長先生に提案しよう!』というタスクを達成することができた』に対しは78%が「そう思う」と回答した。

自由記述欄には「ロボットの時より周りを巻き込んで話せるようになった」「環境に関するレポートを書いたときに心掛けた簡単な英文で説明するということを生かすことができたと思う。また、スピーチで、相手を巻き込んで説明することによって、相手からの理解を深めることができた。しかし、文の構成が、今までに比べ悪くなってしまい、相手が聞いていてわかりにくいところもあったと思う。今回学んだ良いところ・悪いところのどちらもこれからの発表に向けて、良い方向につなげていきたい」といった記述があり、生徒は一定の達成感を感じながらも、次のタスク活動に向けての課題意識をもった様子であった。

(2) 発表隊形の工夫

今回の実践では同じ6人グループでも発表会場を教室と体育館と2パターン行った。教室で行ったときの方がよりリラックスして発表とやり取りを行えたように感じる。一方で体育館では緊張感が増し、聞き手を意識した問いかけは減ってしまったが、発表の雰囲気が高まり、達成感は増した様子であった。また、体育館に移動することで、教室ではできない、TVやプロジェクターを使用した資料の拡大提示をすることができ、生徒の発表意欲を高めることができた。今後もタスクの内容に応じて、発表隊形や場所を工夫する必要性を感じた。

(3) 帯活動によるスマールトークの実施

タスクにおけるパフォーマンスを向上させるために、単元に関わらず以下の帯活動を目的に応じて実施した。

①Greeting Cards

英語で対話をする雰囲気を高めるために、友人とカードに書かれた内容について質疑応答をし、カードを交換する活動である。

②Word Guessing Game

伝えたいことを簡単な言葉で表現する力を養うため

に、示された語句をペアに英語で説明する活動である。

③Picture Description

表された絵を自分の言葉で即興的に説明する力を身に付けるために、絵から読み取れる情報とその絵についてのストーリーをペアに説明する活動である。

6 成果と課題

本年度、附属島田中学校の研究成果を検証するために、青北中において授業改善に取り組んだ。

青北中で、英語の活動で一番楽しみにしていた活動を尋ねたところ、満足度が最も高かったのはタスク活動であることが分かった。55%の生徒がタスク活動が最も楽しいと回答した。このことから、附属島田中に限らず青北中においても、タスク活動は生徒の英語を学ぶ意欲及びコミュニケーションを図る資質・能力を向上させる上で効果的であると捉えることができる。

今後の課題としては、生徒の力を適切に測り、その後の学習活動への動機づけとなる評価方法、特にルーブリックの適切な作成が考えられる。単元の冒頭に評価規(基)準を生徒に示し、単元のゴールの姿を具体的に見せることで、生徒のパフォーマンス力の向上を促す必要がある。また、同じパフォーマンスを評価しても、教員によって評価が分かれることも課題である。これらの課題を克服しつつ、島田中の実践をより多くの中学校の授業改善につなげていきたいと考える。

<参考文献>

篠宮広樹・梅田 晃(2021)「TBLTをベースにした発表型・やり取り型の2領域統合型言語活動」『静岡大学教育実践総合センター紀要』31, 407-414